

## メータオ・クリニック支援の会設立にあたって

JAM 代表 小林潤

このたびメータオ・クリニック支援の会を立ち上げることになりました。メータオ・クリニックへの支援は亡き父：小林修へいただいた香典をもとに行ってきましたが、それ以外にも皆様の多大なる支援をいただいた結果なんとか今回会の立ち上げまでたどり着くことができたと思っています。改めて深謝いたします。会の支援はメータオ・クリニックへの支援を通じて難民へのよりよい支援につながっていくことはもちろんですが、会を支援してくれる皆様、活動をする皆様へもお金でない還元ができればと考えて会を主催していただけたらと考えております。国際協力はいろいろな形があり、現場でやるだけでなく日本においてやることのほうがむしろ重要な面もあります。さらに長期に滞在しなくてもできることは多くあるはずです。しかしながらこのようないろいろな国際協力の形態が効果的な支援につながるには、いい組織が必要になると考えております。皆様のいろいろな立場での協力が、チームになりいい支援を届けられつづけたらと考えています。

このホームページをみて興味をもっていただいたら会の活動を是非覗いてみてください。遠慮なく連絡してみてください。支援をしたという小さな気持ちがあれば問題ありません。また保健、教育を中心にやっていますが、特に保健や教育の専門性が必要というわけでもありません。できることというのはひとそれぞれかならずあります。気持ちのいい仲間が待っています。

### 慢性的緊急状態(Chronic Emergency)

シンシア先生がメータオ・クリニックを作られてから 20 年近くもたちます。そして小さな小屋から大きな病院になり、地域保健まで行くようになっていきます。これは素晴らしい発展です、と素直に喜べないのは慢性的緊急状態 (Chronic Emergency) であるからです。従来、難民に対する支援は一時的でなくてはならない、彼らの国が安定すれば安全にもどってもとの生活を健康的におくってもらうために一時的に支援をするわけです。しかしながら支援をしているメータオ・クリニックは 20 年近くもつづき、国境を越えてくる難民は増え続けているわけです。メータオ・クリニックが学校保健を支援している、学校は行く度に数がふえています。またその学校で暮らす子供たち (孤児もしくは、両親と離れて暮らしている) は 2007 年が 500 人近くだったのが、2008 年では 1000 人も超えてしまったといわれています。支援する活動は即効性がないといけません。しかし 20 年もつづいていることから彼らの自立発展性を考えて継続性にもつなげる支援が必要にもなっています。しかし継続するということはすなおに喜べない状態、Chronic Emergency が続いています。

### 余計なおせっかい理論

開発途上国の支援を考えるときに必ずでてくるのが、「余計なおせっかい理論」です。援助をすることによって、かえってこれら彼らの生活や伝統をこわしてしまうのではないかと？ 本当は彼らにとって援助は迷惑ではないかと？ お金が欲しいだけで、日本人がいつか活動することは本心では歓迎されていないのではないかと？ こういう疑問は国際協力をやっているとき常につきまってくることもかもしれません。また私自身の一生考えていくことかと思っておりますし、決して忘れてはいけないテーマであると考えています。さて、ミャンマー (ビルマ) からの難民に対する支援はどうでしょう。この疑問はあまり考えることがなくともやっつけようです。上記に書いたように、そこに支援が本当に必要な人たちが増え続ける状態でありますから。しかしながら支援の会としては、この余計なおせっかい理論を忘れないようにやろうと思っています。メータオ・クリニックは、難民キャンプのなかにあるわけではありませなし、決して支援に対して受身ではない。彼らは逃げてきたというより自由を求めてきたといったほうが強いかもしれないのです。

### メータオ・クリニックの雰囲気

メータオ・クリニックはミャンマーからの移民が自治する病院ですが、特筆すべきことは非常にリベラルな運営をしていることです。シンシア先生の強いリーダーシップによってなっていることは確かなのですが、あらゆるものを受け入れる大きさがあるといえます。病院がある街が接する国境のミャンマー側にはカレン族が多くすんでおり、クリニックも多くがカレン族ですが、他の民族も多く働いています。また欧米や日本、台湾などからきたインターナショナル・ボランティアも多いですが、スムーズに受け入れられています。通常、技術支援を受けられている多くの途上国の機関でもこれほど受け入れの雰囲気がいいところはないのではないのでしょうか。ここで働いた多くのボランティアはここを殆ど好きになっていきます。これは当たり前のことの様ですが、実はあまりみられないことだと感じています。援助するほうと、されるほうの関係によるアンバランスな関係、また援助するお金をもたない若いボランティアが受け入れられるまでの困難、これらが強く感じられないのです。これは彼ら民族のもっている民族性によるものだけでなく、クリニックの非常に民主的な運営方法と、誰でも受け入れる抱擁さにあるのではないのでしょうか。